

598-49



1200501529080

98

19

四年支那

支

73

集

那支



著郎治

兼田



版

堂



堂

集

歌

那支年青



著郎治兼田飯

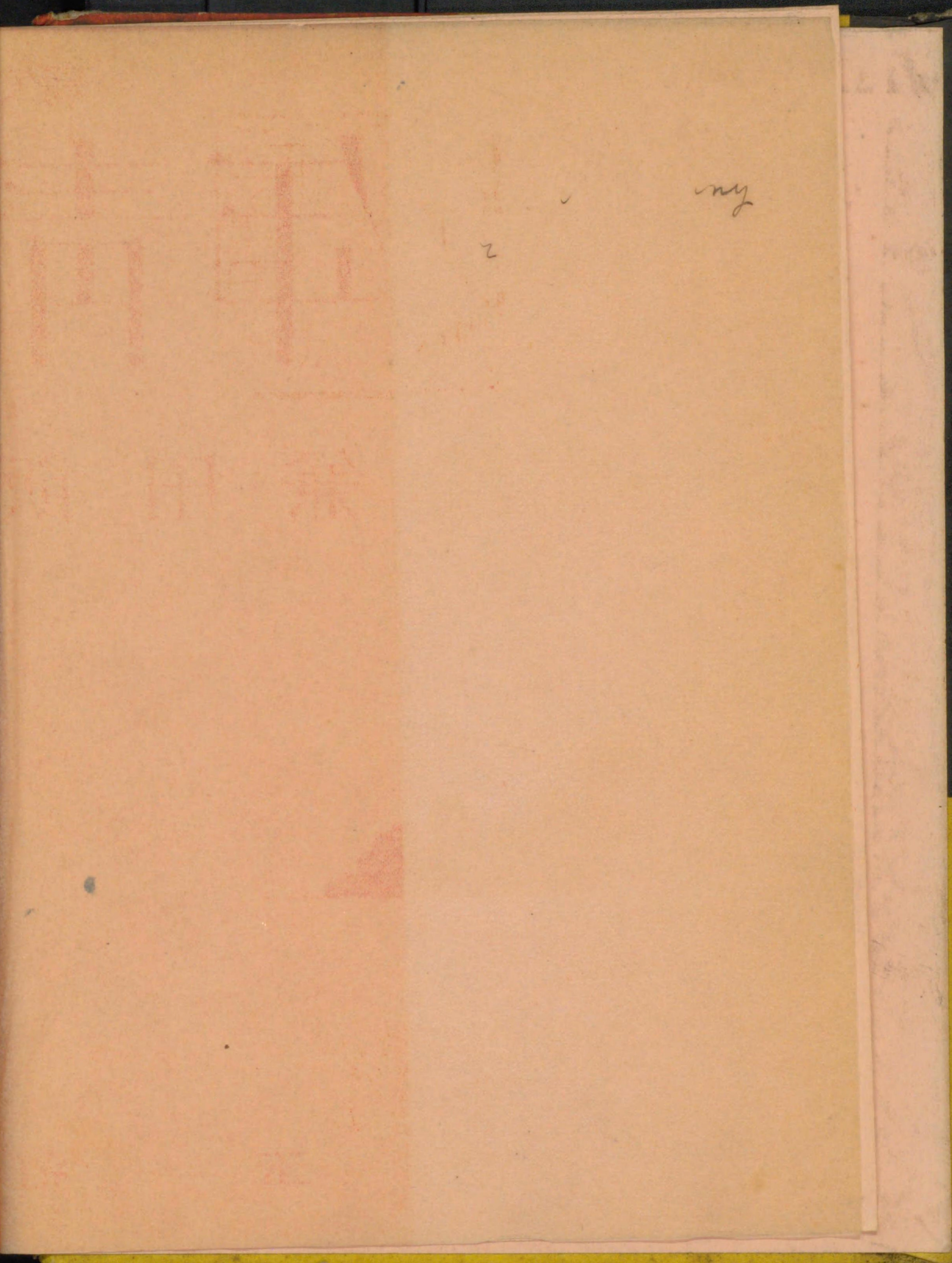


版

堂

玉

紅



序
文

.....

前
田
夕
暮
氏

装
幀

.....

恩
地
孝
四
郎
氏

598-49

序

飯田君が何時か臺灣の蕃地へ行つたときいた時、君の本然的な姿を、原始的自然や、人間生活のなかに、はつきりと見出でやうとするのだなと思つた。果して、臺灣の風土と生活は、君の感興を全身的に振撼した。前歌集「女體は光る」のなかで、臺灣の諸作が素晴しく新しい詩情を昂揚してゐるのは、全く著者の體に流れてゐるものと、「臺灣」といふ一個の生きものの體のなかを流れてゐるものと

が、會つてない迫力を以て合流したと觀れば觀られるのだ。次に君の行かうとする未知の郷土は大洋洲か南洋諸島かでなければ、全然それらと面貌を異にするソベエト露西亞かと、私は密かに期待してゐた。が、君は突如として「青年支那」の新しい地圖のなかに、新しい飯田兼治郎を見出でようとして己を突放した。海を越えて「をををを霧の底へ没落する」深夜の上海に、「資本主義最後のうめき」を聞き、「黄と緑に塗りつぶされた露支國境地圖」に「母國を亡つた若いババが土の上に坐つて子供にキスしてゐる」姿を見出でて、「亡命者のこころもとなさ」をひたすら感じながら、更らにハル

3

ピンでは、「ロシヤ文學のスローガンをかかげた列車が放射するモスクワの激情」を激情し、「燈火を消した苦力列車のひびき」に悲壯なる驚異を痛感し、五月の南滿洲の農場に、鮮農の痛ましき生きやうを心より歎き、更らに「愛を失つた體に突きささつてくる眞赤な支那ナイフ」に昂奮し、「誰も知らない支那人街で殺される自分を考へ」て、暗い深夜の支那街を彷徨し、遂に「腹の底から話しあひたくて支那の青年に頭をさげた」著者の心境を、可成りに尖鋭化したプロレタリア意識を以て、手榴彈を投げつけるやうに歌つてゐる。といふよりはベタベタと赤インクをなすりつけるやうに、其激

情を「フラツパーなソヴエート少女オルガの新鮮な魅力」でぐいぐい強引してゐる。歌集「青年支那」！著者は青年支那の赤爛れた内臓のなかに、自己の生活感情を痛切に感じ、自己の姿を更らにはつきりと發見してゐるのである——と、此處まで一氣に書いて來てから、さて、と私はペンを措いた。何が私をしてペンを措かせたか、著者は其激情の爲めにひつばたかれて、その餘りに本能的迫力の爲めに、加ふるに其特異なる素材のために目つぶしを喰つて、些かあわててはゐなかつたか、餘りに性急な言葉の速度が、さながら機關銃の彈丸のやうに素速く、バンバンと響をたててはゐるが、對象の

足もとに土埃をたててゐるの觀はありはしないか、といふのは其表現方法に就いてである。其激しい彈力は一彈で必らず對象の心臓部を貫通するだけの自信と實力とを持つてゐる著者である。それにも係らず著者はあせり氣味にあとからあとから釣瓶打に打ち出しているのだ。この釣瓶打が全局の上から觀ればある偉大さを感じさせはするが、彈丸過剰の憾みがないでもないと思ふ。とはいへ著者の態度は、現代の歌壇に於ては、最も眼覺めたる人の一人であることを私は推稱せざるを得ない。マルキシズムの爲めに其方法を謬またれず、眞にプロレタリア意識に依りて己を生かし、自由律短歌を生かし

てゐる著者の旺盛なる意欲を私は推稱する。此歌集から缺點を見出さうとすれば、或は一二に止らないかも知れないが、今はそんなことは問題でない、といふ程歌集「青年支那」は眞に新しき時代性を多量に所有してゐる。此一點だけでも著者の作品は斬然として高く水準を抜いてゐる。時代の後継者「青年支那」に祝福あれ！

昭和六年十月

前田夕暮

青年支那目次

I 飢えたものの目

(五十四首)

- 飢えたものの目(二首)……………五
- 露支國境地圖(八首)……………七
- 母國を失へる人々(十一首)……………一二
- 空漠たる哀愁(三首)……………一九

風景(五首)……………二一

白い風車(二首)……………二四

青いポスト(四首)……………二六

鮮農(十首)……………二九

苦力列車(五首)……………三五

母の目(四首)……………三八

Ⅱ コスモポリタン上海……………(四十三首)

上海の顔(六首)……………四五

起重機(八首)……………四九

深夜の上海(十四首)……………五四

印度人(八首)……………六二

黄女士(七首)……………六七

3 Ⅲ 危険信號のある貞操 (六十二首)

支那人街 (九首) 七五

碧山莊阿片窟 (七首) 八〇

阿片をのむ (三首) 八四

支那少女 (四首) 八六

海を抱へる (六首) 八九

ロシア少女 (十二首) 九三

ミイラ (九首) 一〇〇

性慾 (六首) 一〇五

青島 (六首) 一〇九

Ⅲ プロレタリア風景

..... (五十首)

萬國寢臺車 (四首) 一一七

あふれる苦力 (三首) 一二〇

油房風景 (十二首) 一二二

青島屠牛場 (六首) 一二九

赤いハルピン (四首) 一三三

脱落するもの (四首) 一三六

ある自己 (二首) 一三九

愛 (一首) 一四一

生蕃蜂起 (六首) 一四二

A夫人 (二首) 一四六

新ロシア風景 (六首) 一四八

I 飢えたものの目

一	飢えたもの	一
二	飢えたもの	二
三	飢えたもの	三
四	飢えたもの	四
五	飢えたもの	五
六	飢えたもの	六
七	飢えたもの	七
八	飢えたもの	八
九	飢えたもの	九
十	飢えたもの	十

「飢えたものの目」のなかには、
茫漠たる大陸にただよつてゐる、飢えたもの、
貧しいもの、國を失つたもの、虐げられるも
の、弱いもの、姿を主として歌つた作品を
集めて一篇とした。

それは、はつらつとして新興するものの反面
にある、虐げられた人々の姿であり、強國の
下にふみにちられる、國を失つたものの感情
であり、革命の裏面をなされる、犠牲者の姿
であり、

また愛を失ひ、一つとして信頼するものをも
たなかつた、自分の姿である。

飢えたものの目が
行衛のない己の旅を急ぎたてるのではないか



飢えたもの
の目

水夫と淫賣と苦力の飢えた目が
己の飢えた目とかち合ふのだ

露支國境地圖

飢えたものたちが日夜あるいてゐる聲音がする
露支國境地圖

狭い巢のなかで生長した己に
茫漠たる大陸地圖の示唆！

地圖を塗りわけて

貧乏な邪魔者が訪れるのをはばみあつてゐるのだ

民族は民族の地圖にたてこもつて
仲間を助け合ふことを知らない

仲間よわれわれはこれでいいのか
彼等を地圖の外へ追ひたてていいのか！

長い間の闇から光りを喚びもどして
地図が一色に塗りあげられてゆくぞ

思想を載せた列車が闇の中をはしりつづけてゐる音をきくのだ
地図の黒い線路

黄と緑色に塗りつぶされた地図は
彼等にとつて脱殻でないか

母國を亡へる人々

母國を亡つた若いパパが
土の上に座つて子供にキスをしてゐる

白樺の原生林から生れてきた粗野さだ
パパに甘へてゐる子供

13
パパは亡命者のころもとなさを
子に話しかけてゐるのだ

革命の痛手を自然のなかに洗つてゐる若いパパの目に
血がかすかにはしつてゐる

をを死にきれずに生きるものの體にしづかにもえてゐる
父性本能

この人達の生活からくるもの
愛でもない悲しみでもない一體何であるのだ

生きるものの心にみなぎる光りを
いつさい失つた人々に對つてゐる！

卓上におかれた堅い黒パン

二月革命のおくりものはこれであつたか

絞首臺を下りて來た白系ロシア人の青色の目がもつ
革命期の憂愁

建設のうしろに亡びてゆく人々

子供は草に話しかける言葉をおぼえて

國を失ひ亡びてゆくものにさへ
手落なく搾取の網がはりめぐらしてある

空漠たる哀愁

毒をのましても焔で焼いても
滅びないで心に巣くつてゐるもの

無てつぼうな己の愛情が心の隅にのこしていった
空漠たる悔

空漠たる蒼空のもとにゐて
信賴すべきもの一つもないさびしさ

風 景

想思樹の防風林につつまれ
穀物の袋をうんと積みあげた村落！

大陸の日が沈む地平線は
海のやうに傾いてゐる

疊々たる大豆の野積の上
銅錢ドシイをかぞへてゐる支那の子供

大豆をはちきらせた麻袋の荒い感觸が積みあげられた
野積！

こはれた城門の壁に雲雀が啼いて
舊い支那の横顔がほつかり

白い風車

紅い地平線の落日に

白い風車がひようひようとまはる寛城子

ひようひようと風音をたててまはる白い風車に
愛情をのせてゐるのだ

青いポスト

青いペンキで塗られたポストの口から
ほつかり妻の手紙がくるのでないか

ジャパンにゐる妻の愛情が
青いポストからあざやかに寫されてくる

いつの間にか己の愛情の外に生活してゐる
妻を発見した

行衛のない己の旅をゆくさきにまつてゐる
妻の愛情！

收穫期がくると大陸を追ひたてられる
排日のさみしい犠牲者・鮮農

鮮
農

弱いものは

いよいよ弱いすがたを大陸の風にふきさらしてゐる

鮮農のおどおどした目に

強烈な己の意志を働かしたさみしさ

闘ふ力の無いものが

一番よいさびしさをもつてゐるのではないか

一塊の土も所有しない

鮮農の無執着さがひしひしくるのだ

ただ・そつと空を仰いで

また大陸をながれてゆく弱いもののがた

ずきずき頭にとほつてくる弱いものの意志のなかに
自己を反省する

しいたげられたものの心のふかさが
己をあざけつてくる夜！

頭に針を突き刺された冷たさをなげつけていった
弱いものの意志

あるだけのものを搾りとられた鮮農が
地平線にむかつて歩いてゆく



苦力列車

苦力列車は燈火を消して茫漠たる大陸を密行する
モスクワへ

心臓が破裂して死ぬ空想を抱いてロシアの汽車にのつてゐる
深夜！

燈火を消した苦力列車のひびきが
頭のなかを通過してならない

密閉した寢臺車の鏡にうつる
己の飢えた目をおそれる

密閉した寢臺車が
永久に走り止むときがない豫感

母の目

死の豫感がひしひしとくるので
夜の寝臺車にひとり遺書を書いてゐる

このまま空間に消えてゆく想念を侵してくる
母の顔！

しよんぼり己の寫眞をみつめてゐる
ジヤパンの母を呼ぼうとして窓を開けた

Ⅱ コスモポリタン上海

中風でほほけた母の目に
いつもはりついてゐる己をおそれる

四十餘ヶ國の人種によつて構成された、國際都市上海、
この人口三百萬の大都が、政治統成無しに、××主義的に
雜然とした構成をなしてゐることは、帝國主義の統成の下
に生長し、政治的統成無しには、社會が構成し永續して行
けないといふ。概念を植えつけられてゐる私にとつては、
大きな驚異であり、ふさがれてゐた目の前に、廣々とした
大海が展開された氣がする。

これを短歌形態に見れば、上海はまさに自由律である、舊
定形律でなければいけないといふ、封建的な概念をもつて
ゐる人々は、目をふさいでゐる、概念をはらつて、自由律
の洋々たる大海を見るがよいと思ふ。

本篇には上海を題材とした作品のみを収めた。

青年支那のエネルギーは五月の暖風にあふられ
上海を侵した

上海の顔

打倒帝國主義のスローガンが粉黛する

コスモポリタン上海の顔！

プロレタリア支那が黎明にかかげた

青天白日旗のひるがへる港

河口に展開するビルディングの巨體

アメリカはアメリカの旗をかかげて

ソヴェイトの赤旗をひるがへした

黒いビルの陰影がゆれる黄浦江

己の心臓に逆流してくる青年支那の血にまみれる
五月

ナツトスモールンジャパンイスカレート
クヤイニートとさけんた青年 (上海)

起重機の意志

シヤンハイの河口に躍動する起重機は
青年支那のすばらしい膂力だ

巨大な起重機は青年支那の食糧を陸上する
大空を廻轉して

大空を壓する起重機の上にたてられた
青天白日旗の若々しい力

青年労働者は

國辱記念日の旗をおしたてて江を逆る・五月

船體を空にまきあげられたジャンクは
破れたメーデーの旗をたてたまま

近代科學のころよい感情を空におどらせて
回轉する起重機

國際都市の大空を支配する
起重機の鐵柱が放射する力

がつしりした起重機の意志に
己の傷いた心をいだかせるのだ

深夜の上海

があーんと

赤い霧^ガの底で爆発する都會を抱いてゐる胸の痛みだ

資本主義没落のロープを断ちきる上海

深夜のネオンサインが燃える

いきなり暗黒からくる殺人請負業者の拳銃

己は痛む胸をひろげる

赤色霧カスのなかに炎火をあげる上海
ロシアダンサーの肉體の亂舞！

プロレタリアは革命の幼兒を抱いて
黄浦灘パンドンの空に旗をかかげた

貞操革命の桃色ズロースが上海を股ぐ
銀相場崩壊の深夜

をををを霧カスの底へ轉落する上海！
資本主義最後のうめきをあけて

資本主義の墓標は青く赤く
夜の空にくるめくネオンサイン

銀相場崩壊の恐怖

その前夜の歡樂を踊る四川路のダンサー

歡樂の底からわきあがる陰影に侵されたダンスホール
地球崩壊期の幻像！

をを没落の段階を一氣にとび下りる上海！
下層街のベットに混血兒がねむつて

帝國主義没落の旋律を共感する人種がまきあげる音響
空のない街

支那街のすりへらされた舗道がもつ
ストリートガールの飢えた目だ

ブリキ製の都會をたたき壊して新しい世紀がくる！
楊子江の流れ

印度人

黒い布でつつんだ頭のなかにもえてゐる
しづかな反逆の焰

どの人種からも賤められる黒人の素朴な顔を
雨は愛してゐる

印度のもつ神秘的な目の光りが
しんしんと季節雨のなかにもえる

雨のなかに一日じつと立ってゐる印度人が
いきなり黒い焰をあげるのではないか

國をとられたものの感情が

黒い皮膚の下を逆流してゐるのだ

火車の四等車が印度人を突きおとしていった
上海の季節雨

侮辱のドン底から微笑してゐる黒人・
しづかな焰をあげた微笑だ

雨に濡れた印度人の黒い頭布！
ガンヂイが話しかけてくる

黄 女 士

黄兆珠は上海火車会社の婦人車掌

革命記念日のスローガンを書いた
赤い腰巻をまきつけてゐる

新興支那の前線をゆく黄女士の

赤い帽子・赤いスカートのかがやかしさだ

革命記念日の激情をはちきらせた體で

火車会社の職場を守つてゐる

赤い腰巻があざやかに記念日の空に翻へり

氣狂ひのやうにはしる火車

労働者を満載した無軌道車から

ひらりとひるがへした赤い腰巻のアジ

己にがつしり腕をくんでくる黄兆珠の體だ
若い支那の舗道を歩む

貞操から解放された女性のほがらかさだ
支那は地球の上にバウンドする

III 危険信號のある貞操

生命を投げ出した自分にとつて、支那人術も、殺人請負業者のピストルも、まっ赤に燃えてゐるロシアの少女も、支那の少女も阿片窟もなんでもなかつた、死を楯に、その一つ一つの體をぶつつけていつた。

「危険信號のある貞操」には主として、この間に生れた無てつぼうな愛慾を主として詠んだ作品を集めた。その一首一首が自分にとつては生命がけのものであり、自分の體の一片の氣がしてならない。

いきなり刺し殺される
ヒステリカルな感激を抱いてゆく支那街

支那人街



愛を失つた體に突き刺さつてくる
まつ赤な支那ナイフの昂奮

支那人の體臭がみなぎつた街を
突きすすんでゆくすてばちな心

支那人の顔・支那人の顔
己を殺してくれる奴があると思ふとなつかしいのだ

誰も知らない支那人街の底で
殺されてゐる自分を考へてゐる・夜

いきなり己の生活が消えてしまふ
昂奮にもまれもまれてゆく

ドン・と簡単に打つてくれるピストルはないか
うつろになつた體を！

危険地帯の感激をひしひし味はつてゐる！
殺されたいのでいつばいだ

人生をあきらめきつた支那人とならんで
共同租界を歩いてゐる

碧山莊阿片窟

阿片のきれた支那人の體をはつきり感じる
愛を失つた心

體を阿片でしびらせてゐる
支那人の氣持に同感されるのだ

阿片にしびれた體が
アンペラ一枚の小屋にねむつてゐる安けさ

アナキズムは

燈火にくすぶる阿片の不思議な魅力だ

生命を安々と賭けた阿片隠者のまへを
革命は通過した！

阿片のうすむらさきの煙のなかに
こんこんとねむつてしまいたいのだ

おそらく発見みかることのない阿片窟で
ひとりの魂を抱いて死ぬのだ

阿片を呑む

一片の豚肉のやうにあつかはれる
自分の死體を思ひながら阿片をのむ

ああ・人生の空間を急速度でつい落する
自分を茫然と意識してゐる

愛慾の過古が幻燈のやうに圓い光りをつくつて
消えていった

支那少女

青い支那服を目にかぶせた
少女の體臭と空の匂ひがくる

己の手に消えてゆく支那少女の體に
あかしやの青葉をかぶせた

ひとり埠頭を歩いてゐると

まつ蒼な感情が空からながれこんでくる(大連)

大陸の陽にもえる花あかしやの青葉は

五月の放射路にあふれて

海を抱へる

89
ジャパンに別れてきたミツ子の目が
大陸の地平線にうつる

濁水の上を歩いてゆく！

愛するミツ子がゐるジヤパンの示唆

焼けただれた鐵の棒を

己の心臓に刺しこんでいつた

にごつた大河の底にある地獄の幻像が
不思議な魅力でせまる

愛を失ふた空漠な心が
にごつた海を抱へてゐるのだ

心臓をくりぬかれた體が
 ちぎれちぎれに飛んでゆくのがはつきりわかる

ロシア少女

まつ赤な帽子をかむつた少女が萬國寢臺車から下りてきた
 朝

東洋に潜入する少女オルガーの聰明な目に
己をうつしてゐる

建設の希望にあふれた少女が
己に新しい世界を組立ててくれる

單身東洋へ突撃してくる
オルガナイザーの新鮮な魅力！

ロシヤ語のアクセントで
東洋の言葉をなげつけてくるフラツパーな彼女

赤い五月に潜入する彼女の
いのちをなげだしたフラツパーな・風貌

危険地帯を侵してゐる少女の體にあふれた
一九三一年の情熱

貞操を認識しない彼女のあけはなたれた
體・體・ああ斷崖だ

貞操から解放された少女の青色の目がもつ
奔放な愛情

貞操は思想と國籍をこえて
まつ赤な花瓣をなげつけてくる

危険にふれてゐる生命の躍動が
國籍を無視してせまるのだ

思想を胎んだスラブガールの
震撼たる情熱がおしよせてくる

ミ
イ
ラ

旅順博物館にて三個のミイラを見る
一千年前の山東の農夫

ただ愛を失つただけの人間形態を感じる
ガラス箱のミイラ

千年前の支那服の青さが示唆する
原始世紀の蒼空の深さ

まんなかにおかれた子供のミイラは
青い支那服を着たままの安らかさ

蒼空の色で染められた支那服
地から掘り出されて・青く青く

千年前の青さをあざやかに點出して
己を原始世紀へ誘ひこむのだ

千年前のミイラ男性と女性がはつきりわかつてゐて愉快だ
口笛を吹く！

感情がほろびて形態がのこるのだ・
ひたひたと己をゆすぶつてくるもの

ほろびない人間形態が
 明日の愛情を輸血してくるのだ

ミイラがほつきり感情をとりもどしたほがらかさだ
 旅順新市街の舗道

性
 慾

感情のない戀愛がいくつも體を通過する
 支那

アナキズムは燈火を灯して通過する女體
支那人は支那人の匂ひをのこして

奔放な己の惡血が

黄いろい支那地圖のうへにひろがる

黄河のやうににごつた己の惡血を處女の體に輸血する
感覺

黄河が塗りたての白い汽船を浸してゐる
革命記念日の朝

汽船がのせていつた赤い唇の記憶が
己の感情をいらだたせてくるのだ

青島

地下砲壘の壁に戀人の名を書きつけた
ドイツ兵の手記のしたしさ

死にたくないと書いた壁の文字を
いまはつきりと己の胸に描く

死ぬまで戀人を想ひつづけてゐた若い砲手の感情
みづみづしい樫の芽

地下砲壘を覆ふた若樫の密林が朝潮にはなしかける
青島チンタオ

朝
赤い濃霧ガスをおしぬぐつた青島チンタオのほがらかな全貌

Ⅲ プロレタリア風景

地下砲壘からみる海
若樫の葉さきに白い汽船がゆれて

強國の下に、ながい間蹂躪され、虐げられてきた支那は、いまや新興の氣に燃えてゐる。それは地球の上にバウンドする、一個の巨大なフットボールの様に、巨體に空氣を踏みきらして、バウンドせずには、をかないほどはすみきつてゐる。

人にすれば、支那は、二十才前後、舊態を惜しげもなく精算して、世紀の最も新しい空氣を呼吸してゐる、彼は蒼空のやうに、まつ青な服を着た。颯爽たる青年である。

本篇には、バウンドする支那の本態に觸れたものを收めた。

萬國寢臺車の窓に思想の匂ひがふんぷんする
赤い花束

萬國寢臺車

萬國寢臺車
窓に思想の匂ひがふんぷんする
赤い花束

新しいロシアを横ぎつてきた国際列車の巨大な機関車が
己の體を敷いて通つた

ロシア文字のスローガンをかかげた列車が放射する
モスクワの激情

赤旗をかざりたてて驀進する機関車は
五ヶ年計畫の巨大な面貌だ

あふれる苦力

世界の被搾取階級
支那にあふれる苦力クワレンら鐵砲をあげろ

苦力は膨大な爆發物だ
思想と高粱コウリヤンを雜食して

銅錢ドンペイを握りしめた苦力の心臓にうつされる
ロシア革命映畫のタイトル

油房風景

裸體の苦力がおしかさなつて豆粕をしぼる
 グロテスクな油房風景

豆粕にまみれた唇で
 銀貨クイーンの蔣介石に接吻する苦力

彼等のにぎりしめた一片の銀貨が
 憂鬱な光をはなつ油房

革命は没^{イカテ}法子の呪文を通過して
苦力の性慾がしぼられる油房

豆粕を積みかさねて搾るだけしぼつてゐる
機械・爆發しろ

××主義の手枷足枷をはめられた苦力が
油のなかへ血をしぼりこんでゐる

半分は苦力の血がまぢつた豆油が
たらたら壓搾機をながれる・地下室

共産と資本のアジピラがはり交された豆油倉庫の雨だ
支那

勞金不足のおとし穴から生涯はいあがれない
仕組になつてゐる苦力組織

贅澤病は一人もない統計がれいれいしくはりつけられた
工場

肉を食ふと狂人になるといふ奴等の畏が
ほんとうに信じられてゐるのだ

いくら搾つても搾り足りない
奴等が発見した菜食長命のアジビラ

青島屠牛場

一息になぐり殺すとき
牛ころしの呼吸はまつ赤な血だ！

牛の顔に

人間の顔がかさなつて斷末魔のうめきをあげてゐるのだ

あのやうに無抵抗なプロレタリアを束にして

ぶち殺すところが無いとは言へぬ

あまりおとなしく殺される動物
人間を憎む感情でいらいらする

牛ころしの顔がだんだん牛に似てついに殺される順番がくる
ブル等！

たたきに流れ凍つた牛の血を
べつとり舌でなめた男！

赤いハルビン

133
今のままの生活には踏みとどまり得ない
己に近づいてくる青年支那の呼吸

目を見開いてはつきりと
ソヴェイトロシアの赤旗を見るハルピン

まつしぐら行動に移つていつた
青年支那の激情があふれた大陸

反動の弾丸が體にぶちこまれる爽やかさを感じる
ハルピン

脱落するもの

ひとつきに

鎔鑪の中へつき落してくる奴はないのか

同志のおほかたは
理論と歴史の洪水におぼれて轉落した

線香花火のやうな理論を机の上ではぢらせてゐた
同志の脱落！

新しい生活を築きあげた
同志のがつしりした手を握つてゐる青年

ある自己

プロレタリアの國際的感情に呼びさまされた
己の體がもえる

素裸にむきだされてきた

鋼鐵の強靱さを自體に感じる

生命をすてた無てつぼうさが

やたらに人を愛したくなるのだ

愛

生蕃蜂起

同胞をたたきのめして亞熱帶の太陽の下にあげる凱歌は
寂しかろ

震撼たる經濟革命の嵐に吹きまくられる原始人の顔
樹木はぐんぐん伸びる

人間を恐れる粗野な生蕃少女の目が
己の心へ焼けついてくる

性力のはりきつた亞熱帶植物
 生蕃の少女は動物を抱いて眠る

人間をみんなぶち殺した
 亞熱帶植物ばかりの島の魅惑！

まつ蒼な海上にほつかり浮んだ植物ばかりの島
 原始へのほがらかな復歸だ！

A
夫
人

からみついてくる軟體動物の觸手

A 夫人の思想の夜があけた

魅惑な感情を發散してペー
ブメントをゆく貴女の體は
まつ赤な石油槽

新ロシア風景

集團農場の小麥は思想をはらんで
世界の市場に氾濫する

荒地を開拓するトラクターにのつかつた
少女の顔が蒼空にうつつて

世界の飢えをみたさうとする小麥が青い芽をふいた
ロシア大陸の朝

温室の扉を開けて

日光をいつぱい蔬菜にあびせてゐる少女

巨大な石油輸送管をながれる石油

地球がいまにもえるよ

大冶金工場のまつ黒な煙のなかに哄笑する
スターリンの顔

卷末記

私の性格から爆發してくる、無鐵砲な愛情を精算するため、漠然として、握むところのない大陸の空漠さにあこがれを感じ、本年五月ただ一人で、トランク一つを提げて支那旅行に出かけた。

私はそのとき、まったく無鐵砲にも生命を投げだしてゐた。それは死をねがふ心ではなく、死を恐れない強靱さであつた。大連から滿鐵東支鐵道を経てハルビンへ、それより長驅シヤンハイに到る、ホテルからホテルへ、ガイドからガイドへ渡されていつた二十日間の旅であつた。

私はひさりぼつちで上海の黄浦灘・四川路・南豆路・大馬路・新世界・租界・等々、支那街から支那街へ、數ヶ國の人種にもまれながら、歩きまはつた。

危険な上海も生命を投げだしてゐる私には少しも危険でなかつた。四川路のダンスホールを、三つ四つ踊れもしないのに廻つて歩いた夜、急に歸りたくなつて、銀貨や銅貨を兩替する暇もない程、急に翌未明出帆の長崎丸で長崎の土を踏んだ。

本著「青年支那」に収めたのは、この支那旅行の收穫全部約二百首で、詩歌、短歌月刊、短歌雜誌、歌壇新報等の七・八・九月號に發表した作に、少數の未發表作品を加へたものである。歌集として量は多くないが、私にまつて、一首一首に自分の血が脈々と通つてゐて、深い愛着を感じるのである。

青年支那は、昨秋刊行した、純自由律歌集「女體は光る」に續くもので、全篇自由律の形態によるもののみである。

私は昭和三年三月、前田夕暮氏の「詩歌」が復活するまで、前期詩歌發刊後より、七ヶ年作歌を中止してゐた。この間に蓄積された制作慾が、憤出して、四五兩年に、新形態の「女體は光る」一冊を

完成せしめた。

しかして、「女體は光る」刊行後、また半ヶ年餘に涉つて、作歌を休止し、燃えあがつてくる制作慾をじつと押へてきた。それは一つの大きな對照を握んだ時に、一気に全制作力を爆發せしめて作歌するための準備行爲であつた。この半ヶ年餘の準備期間中押へてきた作歌慾の爆發期に相遇したのが、支那旅行であつた。

私は旅行後約二ヶ月にわたつて一気に、本著に収めた二百首を制作した。

しかしそれは、他で想像するやうに一氣可成に易々二百餘首が創作されたのではなくて、その二ヶ月間は生命を打ち込んだ作歌苦を味はつた。

それは月満ちて生れる母胎にも、なほ産褥の苦惱があるのと同じである。作品の出來不出來は別として、現在の私にまつては、最も愛すべきものである。

この作歌態度は、從來の歌人の、折にふれ、時にあたり、「詠み

きたり詠みすて」といふ作歌態度とは、全然正反對である。しかし私の今後の作歌態度が、爆發的ばかりであるといふのでは無い。私にも日常生活より、その時その折に生れる歌があることは當然であるが、ただ「青年支那」の作品は、如上の作歌態度によつて完成せられたものである。

自由律短歌は何處へ行くか。いかに發展するかといふ問題はむづかしい。それは自由律短歌が未だ發展過程にあるからである。

しかし私の自由律短歌が何處へ行くかは、私のものだけに、やはつきり豫感できるのである。

これを理論的に體系づけることは、この短い卷末記では困難であるが、ポイントは、さう多きにわたるはずがない。

Iは形態である。

「青年支那」の歌の形態は主として二段的構成によつてなされてゐる、これは「女體は光る」のもつ形態よりの、延長發展であつて、

私の自由律創始以來、この形態を主として用いてゐる。最近石原純氏、土田杏村氏等によつて、二段的構成が論じられてゐるが、自由律理論は、常に作品の發展過程の後より理論づけられてゐると思ふ。

矢代東村氏は「女體は光る」の批評文中に、『著者の二段的構成及其の二行的發表方法は殊更に異を建てたものだ』と言つてゐられるが、私は、殊更に、異を建てたのでなくて、私の自由律短歌は、かくすることが最も効果的であるこの藝術的良心から出發したのであることを、ここに斷つて置く。

「自由律短歌は何故二段的構成が主體となるか」については、他日私の自由律作品が、發展過程を終へたとき、體系づけて發表する考へである。

IIは發表形態である。

「青年支那」の發表形態は、「女體は光る」にて創始した、自由句切二行構成の方法をまつた、自由句切二行構成は、その發表効果が

認められてか、最近この方法をさる人が、かなり出てきたと思ふ。矢代東村氏は（よく矢代氏を引合に出すが、自由律短歌の人々で、私は前田夕暮氏、土岐善麿氏、楠田敏郎氏、矢代東村氏、清水信氏、阿部静枝氏、石原純氏、土田杏村氏、田邊一子氏をもつとも尊敬し、近しく感じてゐるからである。）同じ批評の中で『現在の自由律短歌は、舊定型律短歌の中に何か忘れものをしてゐる、それは何であるか！』と疑問を投げかけられてゐるが、私は矢代氏のこの言葉を、氏自身の作品に對する反問で無いかと考へる、それは氏の作品が、三行、四行、五行に發表されることに起因してゐるのではなからうか。

現在の自由律短歌の最も批難すべき點は、あまりにも散文化した作品が多いことである。定型律の中に忘れてきたものは、私のこれに對する答案は、短歌的リズムであると思ふ、自由律が、さもすれば散文に、詩に脱落してゆくのは、このリズムを繼承してゐないからである、しかしこの短歌的リズムは、定型律の人々が死守してゐる、五七五七七の調子では無い、短的なバスとソプラノを自由に

有する新しい内容に適應したリズムである。

もしこの説明を、リズムとはやはり、定型律五七五七七のリズムで無いかと、再問する人があればそれは自由律のもつ、その内容に適應した新しい短的なリズムの解らない人である、かういふ論者は一、二年自由律短歌の制作に没頭してみるのがよい、自由律の内容に適應した、實にがつちりとした、リズムが解つてくることを斷言する。これは別言であるが、この自由律の持つ、リズムが解らなくて自由律短歌を批評するのは、疊の上で水泳の練習をして海上の泳法を批評すると同様の認識不足である。

で、自由律短歌の發表形態は、自由句切、二行構成が最も適切であると思ふ。これを三行、四行、五行、六行に發展させてゆくときは、ついに詩に解消するより行き方がなくなるのである。

尙形態及内容に關し私は、歌壇新報九月號に『プロレタリア短歌再建』の題名で、次の小論を書いてゐる。

私は近刊する小著『青年支那』の感想文の中に、プロレタリア短歌に對して『小兒病期のプロレタリア短歌は詩の中へ解消され』と書いた。之に對して、プロレタリア短歌の人々から多少の抗議があるかも知れないと思ふ。『小兒病期のプロレタリア短歌』とは、何を指すかといふ問題についてである。而して『真正のプロレタリア短歌は、如何なるものであるか！』といふ問題についてである。

私は闘争主義、疑スローガン主義の意途のみの下に制作された、作品をもつて小兒病期のプロレタリア短歌であると断定するものである。而して眞實のプロレタリア短歌とは、プロレタリアートの手によつて、或は、プロレタリアイデオロギーを持つブチ、アルによつて前者の場合には、その思想生活、感情、戀愛を創作し後者にあつては、そのイデオロギーの上に空想し、想像し、意途し、客觀したるプロレタリアの、生活、感情、戀愛を表現したる作品を指すもので直接武器として、或はスローガンとして闘争の役に立つといふ、目的のみによつて、制作されない。作品である。

短歌が、直接的な闘争武器として非常に弱小な力しか持ち合せてゐない事は、プロレタリア短歌を制作した人々の等しく、切感したところであると思ふ。今日詩への解消は闘争主義から言へばまことに當然な行き方であると言へる。短い點では、スローガンの方が、寸鐵的に強力があり。長い點で、自由に表現し得る。詩の方がすつと効果的である。

かくして詩に解消された小兒病期のプロ短歌の後に私は短歌藝術としての、眞正なプロレタリア短歌が発生してくることを、當然と信するものである。

その眞正なる、プロ短歌がもつ、内容は、前述の如きものであるが、その形式は、

第一、口語であること。

第二、傳統的短歌の繼續であるリズムをもつこと。(但し之は三十一音律の定形では無論ない)

(今日の、自由律短歌のもつ、短的なリズムをもつもの)

でなければならぬと思ふ、短歌の分野が展開されたる今日、短詩と、短歌との限界は、雑然として、何人もはつきり、指示することは困難であるが、七月號の短歌月刊に、詩人三木露風氏の書いた、短歌と自由の一文の中で、前田夕暮氏の作品を

うす青く

レインコートを濡らして

芽ふきかけた雑木山を行く

雨上り!

と四行に分けて書いた方が、一層律がはつきりわかる………と言つてゐるが、かく四行にわけける事は、詩人と歌人との、もつホエツイの相違に出発するものであつて、四行に書く短歌のもつ短的なりズムをぶち壊してしまふのである。この點で新しく發生するプロレタリア短歌は一行又は二行に發表する形式によらなければならぬと思ふ。

私はこの意途においてプロレタリア短歌が再び永久的素質をもつ

て歌壇に登上することを豫約する。

かくてプロレタリア短歌は小説、劇等の長いプロレタリア文學が侵入し難い、青年、婦人、農業、工業、労働者等の社會層に喰入り藝術として立派な存在の上に、その一方の使命を果し得るであらう。Ⅲは内容である。

自由律短歌のもつ内容、題材は、舊定型律の握んできた題材、内容と異なることが、一つの素質である。自由律短歌作者の中には、定型律で握んで来た、内容を、單に形態を自由律に轉換さしたただけで、制作してゐるのをみうけるが、自由律短歌の起つた必然性は、形態の變革と、定型律に盛りきれなくなつた世紀的な内容を持つ二大條件である以上、單に形態の變革ばかりでは、眞に自由律短歌の確立は、困難であると思ふ。

「青年支那」はこの點において、舊い支那を題材とすることを避けて、新興支那の、思想、風物、生活、愛情、を主として握むことにつとめた。

今日までに、支那滿鮮を旅行して、その作歌を發表した歌人に、與謝野寛、與謝野晶子、北原白秋、土岐善麿、吉井勇、川田順、齋藤茂吉、島木赤彦、尾上柴舟氏等があるが、この諸先輩は、多く、舊い支那、昨日の支那、名所古跡の支那を握んで、歌つてゐられる様である。

この人々の作品と、青年支那の題材、内容を比較して頂けば、定型律と、自由律とが内容において如何に主點を異にしてゐるかが判然とし、自由律勃興の一素因を知つてもらへると思ふ。この人々の中で、土岐善麿氏の作品「佇みて」はやゝ時代性を胎んでゐるが、十年前「佇みて」時代の支那と、今日の支那とは、天地の相違がある、誰か、土岐氏の「佇みて」と「青年支那」この時代性を比較してくれば、短歌そのものの良否でなく、支那を知るによい材料になると思ふ。「短歌を通じて觀たる支那」といふべきものである。

以上で、私の自由律短歌の主要點を大體説明したと思ふ、これが

自由律短歌の確立に、何の程度まで働きかけるか、私は楽しみである。

本著の構成は、便宜上、Ⅰ飢えたものの目、Ⅱコスモポリタン上海、Ⅲ危険信號のある貞操、Ⅳプロレタリア風景、の四篇にわけた。その色彩別は、各篇の始めに書き入れてあるから、讀んで頂けば解る様に、「飢えたものの目」篇には、支那大陸を漂ふ。飢えたるもの、虐げられたるもの、國を失へる人々の姿を歌つた作品を收め、「コスモポリタン上海」篇には、四十餘ヶ國の人種によつて構成されてゐる、世界の自由國際都市上海を題材とした作を集め、「危険信號のある貞操」篇には、私の愛慾生活を中心とした作品を、「プロレタリア風景」篇には、新興支那の風物、イデオロギイを主題とした作品を收めるといった風に、同じ傾向のものに分類した、これを色彩で表現するなれば、「飢えたものの目」は黒色・「コスモポリタン上海」は青と黄・「危険信號のある貞操」は桃色・「プロレタリ

「風景」は赤色である。

終りに本書を刊行するにあたり、恩地孝四郎氏が、私の飛びつきたいほど好きな装幀をしてくださいましたこと、前田夕暮先生から、再び序文を頂いたこと、出口王仁三郎聖師が、特に私を擁護してくれられることに、心から感謝をささげる。この三つが本著發行に對し、ごだけ私を勇氣づけてくれたか知れない。

また發行所紅玉堂の前田隆一氏から、話があつて廣告文に豫告した、支那旅行案内は、目下交戦中で旅行不可能なので、添附することを中止し、この旅行文は臺灣の分とを合せて、「芭蕉と銀貨」の題下に、何かの雑誌に順次發表することになつてゐる。

昭和六年十月

日支交戦の新聞を編輯しつつ

飯田兼治郎

詩歌叢書第十二篇

歌集 青年支那

定價 壹圓五拾錢



著者 飯田兼治郎

發行者 前田隆一
東京市本郷區森川町一

印刷者 長田正雄
東京上野公園不忍池畔

印刷所 帝都印刷社
東京上野公園不忍池畔

昭和六年十月二十五日印刷

昭和六年十一月一日發行

發行所

紅

玉

堂

東京市本郷區森川町一

發賣所

東

京

堂

東京市神田區神保町

★新興自由律による

飯田兼治郎著

前田夕暮氏序
長谷川利行氏裝

再版發賣

女體は光る

四六版 二百頁

箱入天金美裝

價壹圓五拾錢

送料不要

◆新興自由律短歌建設へ……全力を擧げて躍進しつゝある「詩歌」が歌壇におくる第一の純自由律歌集だ。

◆近代的野蠻人の稱ある氏が持つ、尖鋭なるプロレタリア意識と異常なる近代的感覺とは、明日の短歌を指示する二つの潮流だ。

◆浸々として舊定型律を征服しつゝある、自由律短歌を批判し、鑑賞し、創作せんとする人々は、まづ本著を開かれよ。

明日の短歌を指示す!!!

東京市外西大久保二八
振替東京二六一六三
白社發行
東京市四谷區
霞ヶ丘一六
短歌月刊社發賣

